

妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響

澤田 匡人¹ 新井 邦二郎²

本研究は、小学3年から中学3年までの児童・生徒を対象に、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性が、妬み感情の喚起と、その対処方略選択に及ぼす影響を検討することを目的とした。研究1では、妬みの個人差を測定する単因子構造の児童・生徒用妬み傾向尺度 (Dispositional Envy Scale for Children ; DESC) が作成され、十分な信頼性、妥当性が認められた。研究2では、予備調査において、妬みが喚起される8つの領域と、16種類の対処方略が見出された。この結果を受けて、研究2の本調査では、仮想場面を用いた対処方略の分析が行われた。その結果、「建設的解決」、「破壊的関与」、「意図的回避」の3因子が抽出された。次に、これら3種類の対処方略の選択に関わる要因として、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性を取り上げ、領域別・年齢帯別に因果関係の検討を行った。パス解析の結果、成績領域を除き、中学生では領域重要度が妬みの喚起に影響を及ぼしているのに対し、小学生ではそうした傾向は認められなかった。また、小学3・4年では、妬み感情の対処として主に破壊的関与が選択される傾向にあった。さらに、全ての領域を通じて小学5・6年以降では獲得可能性が高いと妬みを感じやすく、意図的回避と建設的解決方略を選択しやすいことが明らかにされ、妬みの対処方略選択に発達差のあることが確認された。

キーワード：妬み、対処方略、妬み傾向、領域重要度、獲得可能性

問 題

近年、子どものさまざまな問題行動やいじめの背後に妬み (envy) が作用している可能性が指摘されている (土居, 1998)。たとえば、いじめの理由の最たるものは「なんとなく腹がたって」であるのに対し、いじめの被害者側には「わたしをひがんだり、しっとして」いじめられた、と回答する子どもがいる (清永・麦島・高橋, 1985)。このことは、いじめの理由として妬みが存在している可能性はあるものの、いじている本人がそれを意識することは少ないことを物語っているといえよう。また、新藤・斎藤 (1998) は、やつあたりの対処や気晴らし的対処が、中学生におけるいじめ行動に影響していることを明らかにしている。したがって、自覚されにくい妬みという感情と、その対処を取り上げることは、いじめや不適応といった子どもの問題行動のメカニズムを解明する上で意義がある。そこで本研究では、妬み感情³の喚起と、その対処方略の選択に関わるさまざまな要因の影響を明らかにすることを目的とした。

従来の妬みに関する実証的研究は成人を対象とした

ものがほとんどであり、主として妬み感情の喚起過程の解明に焦点が当てられてきた。妬みの喚起要因に関わる代表的な理論としては、Tesser, Campbell & Smith (1984) の自己評価維持モデルと、Salovey (1991) の妬みにおける社会的比較過程が挙げられる。両理論に共通する妬み感情の喚起要因は、(1)比較される他者は自分と心理的に近い、(2)比較の生起には、領域への関与度が影響する、という2点である。すなわち、自分と心理的に近いものが、自分にとって重要な領域において優れた遂行をなすと、自己評価が脅威に曝され、その結果として妬みが生じるのである (Salovey, 1991)。このように、比較される領域の対象が自分にとって重要であればあるほど、妬みの喚起が促されるという点については、一貫した結果が得られている (たとえば、Tesser & Collins, 1988 ; 坪田, 1991)。さらに、特性としての妬みが、特定の場面における妬み感情を高める効果を持つとの報告もなされている (Smith, Turner, Garonzik, Leach, Urch-Druskat & Weston, 1996)。したがって、

³ 妬みは、他者の優れた特質や業績、所有物が、自分ではなく、そうしたものを望むか、その他者がそれを持ってなかったらよいのにと望む時に生じる (Parrott & Smith, 1993)。そこで本研究では、妬み感情を「他者が自分よりも何らかの点において有利な立場にあることを知ることによって引き起こされる、不快な感情反応」と定義した。

¹ 筑波大学心理学研究科 sawada@masa.to

² 筑波大学心理学系 araikuni@human.tsukuba.ac.jp

妬み感情の喚起を促す要因として、対象の重要度といった状況要因だけではなく、個人差要因も考慮し、妬みを抱く傾向を検討する必要があるだろう。妬みの個人差とは、場面に限定されない妬み感情の感じやすさであるため、妬み傾向が高ければ、多くの場面を通じて妬み感情を感じやすいと考えられる。

ところで、妬み状況とは、換言すれば、自分の欲求や目標が満たされないストレス状況であるから、妬みを感じた後の行動は、妬み感情を処理するために選択された対処方略⁴であるといえる。では、妬みの対処方略とみなすことができる行動にはどのようなものがあるのだろうか。Silver & Sabini (1978) は、妬みの特徴として、妬みの対象となった相手を貶すことを挙げている。同様に Tesser & Smith (1980) も、妬みの喚起に付随してライバルの優れた遂行を邪魔するといった行動が起こされることを指摘している。一方、妬みには、必ずしも優れた相手への攻撃といったネガティブな行動をもたらすだけでなく、ポジティブな効果があることを認める立場もある。たとえば、Smith & Whitfield (1983) は、妬みと感じていることが当人に受容されるならば、妬みは自分が何を欲しがっているのかを確認するための自己覚知の情報源として用いられ、人間の発達に重要な役割を果たすと主張している。また、Salovey & Rodin (1988) は、「自己信頼」（できる限り妬みの感情表出を避け、他人に助けを求めずに自分なりに努力する）、「自己補強」（自分のポジティブな面に目を向ける）、「選択的無視」（自分にとっての目標の重要性を再評価し、自己の関与の度合いそのものを低める）という3つの方略があることを見出している。さらに、妬みの対処方略の構造をより網羅的に検討したものに、Vecchio (1997) による職場における妬みの対処の分類が挙げられる。彼は、12種類の妬みの対処について多次元尺度構成法を用いて、「破壊的-建設的」と「他者に関わる-関わらない」という2次元が存在することを明らかにしている。

しかし、こうした一連の対処方略の分析は、全て青年期以降の成人を対象とした研究であり、子どもがどのように妬みを対処しているかに関する検討はなされていない。職場という人間関係が限られた場面同様、

学校生活を主とする子どもたちにとって、教室は自分と似た境遇にある同年齢の子どもたちと接する機会が多い限定された場であるといえる。したがって、職場の妬みの対処方略と全く符合するわけではないにしろ、教室という場においても、少なからず成人と類似した対処方略を子どもたちが採用している可能性は十分に考えられる。

また、ストレス状況における対処方略の選択に際しては、当該状況のコントロールの可能性が大きく関わっていることが知られている (Causey & Dubow, 1992)。このことを踏まえると、相手が所有している望ましい対象を得ることができるというコントロールの可能性、いわば望ましい対象の獲得可能性の認知が、妬みの対処方略の選択に関わっていることが予想される。Causey & Dubow (1992) は、ストレス状況における問題に対して本人のコントロール可能性が低い小学生は、「悪口を言う」といった行動的な対処を行うことを明らかにしている。したがって、妬み状況の場合も同様に、獲得可能性が低いと認知されると、問題解決に繋がらない方略がとられるであろう。

ところで、子どもの妬みに焦点が絞られた実証的研究に目を向けると、Bers & Rodin (1984) によるもの以外にはほとんど見当たらない。彼女らは、「国語」「算数」「美術」「外見」「運動」「財産」の6領域の仮想場面を用意し、インタビュー形式で6歳から11歳までの児童を対象とした妬み感情や行動に関する多面的な検討を行ったところ、妬み感情の喚起のされ方に発達差があることを確認している。すなわち、6歳から8歳でも妬みを感じることはできるが、その際に、妬みの対象となっているものが自分にとって重要であるかということは特に問題にはならない。しかし、それ以上の年齢に達した者は、重要度の高さに応じて妬みを感じるようになるという。こうした知見は、妬みに発達段階が存在することを示唆する貴重なものといえるが、日米間の文化的背景などを考慮すると、本邦の子どもたちにそのまま当てはめることは困難である。

そこで本研究では、子どもにおける妬みの喚起要因と対処方略に関する検討を行うことを主たる目的とし、以上の議論に基づき次のような因果関係を想定した。すなわち、妬み感情の抱きやすさの個人差、各状況における領域の重要度、および対象を獲得できる可能性の認知が、特定の場面における妬み感情の喚起と、その後の対処方略の選択にそれぞれ影響を及ぼすと考えた。なお、発達によって一連の因果関係がどのように変化していくかを確認するために、8歳（小学3年）か

⁴ あるストレス状況において行われた行動が情動に変化を与えるのであれば、その行動や反応は対処とみなすことができる (Moos, 1984)。そのため、自分の欲求や目標が満たされないというストレス状況である妬み状況に直面し、感情を制御できずに表出するという行動も、妬みの軽減や発散といった妬み感情の変化を与えることが目的とされた対処方略の一種であると考えられる。そこで本研究では、妬みの対処方略を広く捉え、必ずしも問題解決に繋がらない行動も含んだ概念とみなした。

ら15歳(中学3年)までの広い年齢帯を対象とした。

本研究の構成は以下の通りである。まず、研究1において、妬み感情の喚起と対処方略の選択の両方に関わる要因として考えられる妬み傾向を測定する尺度を作成する。次に、研究2では、妬みの対処方略を抽出するための予備調査を実施し、本調査において、対処方略の構造を検討した上で、個人差要因として妬み傾向、状況要因として領域重要度と獲得可能性をそれぞれ取り上げ、各要因が妬み感情の喚起と対処方略の選択にどのような影響を及ぼしているかについて探索的に検討する。

研究 1

目的

人格特性としての妬みの測定を意図した尺度は多くないものの、いくつか作成されている。たとえば、Gold (1996) は York Enviousness Scale (YES) を作成している。また、より信頼性・妥当性が仔細に検討された尺度としては、Smith, Parrott, Diener, Hoyle & Kim (1999) の妬み傾向尺度 (Dispositional Envy Scale; DES) がある。しかし、これらの尺度は、必ずしも子どもを主たる対象として作成されたものではない。こうした状況の中で、小学4年から中学2年を対象とした児童・生徒用妬み尺度(澤田, 1999)がある。この妬み尺度は、自分より有利な他者に対して敵意を抱き、時には具体的な行動として表出する傾向である「他者嫉視」尺度と、他者と比べて有利ではない自分に焦点化し、否定的な自己評価を下す傾向である「自己蔑視」尺度から構成されている。他者嫉視尺度には、妬み感情の抱きやすさだけでなく、妬みを感じた後の行動に関する項目が含まれている。また、自己蔑視尺度には、感情反応というよりも、認知的な側面を測定する項目が多い。研究2では、妬み感情の抱きやすさの個人差である妬み傾向が、特定の領域における妬み感情の喚起と、その対処方略の選択にどのように関わっているかを検証することが目的とされている。したがって、妬みの対処方略とは別個に、妬み感情を取り上げる必要があるため、妬み感情を抱く傾向そのものを測定することに特化された尺度の作成が望まれる。

そこで研究1では、児童・生徒に適した妬み傾向尺度 (Dispositional Envy Scale for Children; DESC) を新たに作成することを目的とした。具体的には、児童・生徒にも理解しやすいような表現を用いて、DES (Smith et al., 1999) の日本語版を作成する。構成概念妥当性については、妬みの中核をなすとされている劣等感情

(Foster, 1972; Parrott, 1991; Parrott & Smith, 1993; Salovey, 1991), および悪意 (Neu, 1980; Salovey & Rodin, 1986; Silver & Sabini, 1978) に相当すると思われる敵意・短気との関連から検討する。また、併存的妥当性については、澤田 (1999) の児童・生徒用妬み尺度を用いる。

方法

被調査者

栃木県下の4つの公立小学校に通う3年から6年までの児童422名(男子208名, 女子214名), および5つの公立中学校の1年から3年までの生徒457名(男子224名, 女子233名)の合計879名。調査時期は2000年11月。

質問紙

質問紙は、教示、例、および4つの尺度から構成された。

①児童・生徒用妬み傾向尺度: Smith et al. (1999) の DES 8項目を作成者の許可を得てすべて訳出し、子どもにもわかりやすい表現に改めた (TABLE 1 参照)。尺度の項目は、妬みの頻度(項目1), 劣等感を抱く傾向(項目2, 6), 妬みの一貫した強さ(項目3), 欲求不満傾向(項目4), 妬みの統制可能性(項目5), 主観的不公正感(項目7, 8), から構成されている。尺度は5段階評定(「はい」「どちらかといえばはい」「どちらともいえない」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」)での回答が求められ、妬みの高さに対応する反応から順に5—1点が与えられた。

②小中学生用攻撃性質問紙(坂井・曾我・大芦・山崎, 1998; 嶋田・神村・宇津木・安藤, 1998)の中から、敵意を測定する6項目と、短気を測定する5項目を用いた。4段階評定(「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」)で、得点範囲は4—1点である。

③劣等感情尺度: MG 性格検査(本明・久米・織田・応用教育研究所, 1976)から、劣等感情を測定する10項目を抜粋して用いた。当該概念に反応したものには2点、そうでなかったものには1点がそれぞれ与えられ、得点化された。

④児童・生徒用妬み尺度(澤田, 1999): 妬みの感じやすさを測定するために、主に Gold (1996) の YES を参考にして作成された尺度で、他者嫉視尺度(12項目)と、自己蔑視尺度(6項目)の2下位尺度から構成されている。4段階評定(「そう思う」「すこしそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」)で、4—1点が与えられた。

結果と考察

得点に極端な偏りのある項目が認められなかったの、因子分析(主因子法)にかけたところ、第1因子で全分散の42.5%(固有値3.41)を説明し、第2因子の

12.9% (固有値 1.03) と比べると極めて高い寄与率を示した。なお、第 2 因子に後続する因子の寄与率に大きな変化はみられなかった。次に、Smith et al. (1999) にない、最尤法による確認的因子分析を実施した結果、単因子モデルで CFI = .90 と満足すべき値が得られた。そこで、本尺度は妬み傾向という一つの概念を測定しているものと判断し、8 項目すべてを DESC 項目とした。なお、項目ごとの平均と標準偏差を TABLE 1 に示した。

尺度の信頼性については、クロンバックの α 係数が検討された。8 項目の I-T 相関と α 係数を求めたところ、I-T 相関は .36 - .65 の範囲内、 α 係数は .80 であったため、本尺度には十分な内的一貫性を有していると判断された。

次に、妥当性を検討するため、DESC と、攻撃性 (敵意・短気)、劣等感情、および妬み (他者嫉視、自己蔑視) の各尺度との相関係数を求めた (TABLE 2)。その結果、妬み傾向尺度とすべての尺度との間にそれぞれ中程度の正の相関が認められた。敵意・短気、劣等感情との間に有意な相関が見られたことは、従来の結果 (Gold, 1996; Smith et al., 1999) を支持するものである。したがって、DESC は構成概念妥当性と併存的妥当性を有していると判断した。今後は妥当性の拡充のために、正の相関がみられる変数だけではなく、負の相関があるとされている変数 (たとえば、生活満足度や幸福感) との関係を確認することが期待される。

研究 2

【予備調査】

目的

Bers & Rodin (1984) は、「国語」「算数」などの領域に関する仮想場面を用いた検討を行っている。しかし、これらの領域は欧米の研究者が用意したものであり、本邦の子どもが実際に妬みを感じている場面を反映したものであるとは必ずしもいえない。そこで予備

調査では、子どもが実際に妬みを感じた場面と、その際に採用された対処方略に関する事例の収集・整理を目的とした。

方法

被調査者

茨城県と栃木県下の公立小学校に通う 2 年から 6 年の児童 42 名 (男子 16 名、女子 26 名)、および公立中学校の 1 年から 3 年の生徒 108 名 (男子 63 名、女子 45 名) の合計 150 名。調査時期は、2000 年 5 月中旬から 6 月初旬。

手続き

妬み喚起場面の詳細な事例報告を得るために、私立の教育機関の個室で、半構造化された面接が実施された。面接はすべて研究者本人が行い、内容は被調査者の承諾を得て録音された。面接は以下のような手順で行われた。

① 妬み喚起場面の想起：日常生活で実際に妬みを感じた場面について、可能な限り詳細な事例報告を求めた。面接の際は、被調査者の語彙力の差に配慮し、防衛を避けるために、「妬み」や「うらやみ」などの言葉の使用を控え、Haslam & Bornstein (1996) の教示を参考に、次のように質問した。「あなたがいままでに、友達やきょうだいが自分よりもいい思いをしているのを見て、嫌な気持ちになったときのことを、できるだけ詳しく思い出して話してください」

② 妬みの対処方略の想起：想起された場面ごとに、

TABLE 2 妬み傾向尺度得点と、攻撃性、劣等感情、および妬みとの相関係数

	小学生		中学生	
	男子 (N=147)	女子 (N=157)	男子 (N=195)	女子 (N=215)
<攻撃性>				
敵意	.31***	.41***	.46***	.42***
短気	.21***	.40***	.25***	.25***
<劣等感情>				
	.30***	.37***	.32**	.31***
<妬み尺度>				
他者嫉視	.46***	.67***	.61***	.50***
自己蔑視	.49***	.67***	.73***	.65***

Note. *** $p < .001$

TABLE 1 DESC 8 項目の平均と標準偏差、および第 1 因子への負荷量 (N=879)

項目内容	平均	標準偏差	負荷量
1. わたしは、毎日のようにうらやましさを感じています	2.60	1.41	.78
2. ほかに人より自分ができないと感じるのは、つらいですが本当のことです	3.52	1.41	.77
3. うらやましいと感じると、いつもわたしは苦しみます	2.24	1.34	.72
4. なんでも上手にすぐできる人を見るのは不満です	2.50	1.45	.64
5. たとえどんなことをしても、うらやましく思うとなやんでしまいます	2.28	1.33	.63
6. 自分になにかたりない、と感じると、困ってしまいます	2.92	1.49	.58
7. すべての才能をもっているかのような人たちがいることは、すこし公平でないと思います	2.93	1.51	.56
8. 正直言って、友だちがうまくいくと腹が立ちます	2.29	1.37	.48

Note. 固有値は 3.41。得点範囲は 1 - 5 点。

嫌な気持ちを感じた後に実際に行われた行動についての報告を求めた。

③以上の手続きを事例が想起されなくなるまで繰り返し行った。また、事例の想起がなされなかった場合は、簡単な例を話して想起を促した。なお、被調査者一人当たりの面接時間は10分程度、事例報告数は1—14個の範囲（平均2.6個）であった。

結果と考察

最終的に386事例が収集された。各々の妬み喚起場面が属する領域と、それぞれの場面で採用された対処方略についてKJ法を援用して整理した。その結果、領域に関しては、「成績」(92事例)、「運動」(104事例)、「技術」(41事例)、「財産」(69事例)、「人気」(15事例)、「評価」(21事例)、「環境」(19事例)、「状態」(9事例)の8つの領域の存在が見出された。また、対処方略は16種類(「自助努力」「依頼要求」「無行動」「断念」「助言希求」「共感希求」「相手からの回避」「重要性の再評価」「誹謗中傷」「身体的攻撃」「対物発散」「対人発散」「気分転換」「賞賛」「長所への注目」「下方比較」)抽出された。

【本調査】

目的

本研究では、発達差を考慮した妬みの因果関係を検討する。妬み感情の喚起と対処方略の選択に関わるものとして、個人差要因として妬み傾向、状況要因として領域重要度、獲得可能性の計3つの変数を設定した。そして、これら3つの変数が妬み感情を介して対処方略の選択に至るとの因果関係を想定し、そのモデルの検討を行う。

方法

被調査者

栃木県下にある4つの公立小学校に通う3年から6年までの児童447名(女子221名、男子226名)、および5つの公立中学校の1年から3年までの生徒468名(男子236名、女子232名)、計915名。調査時期は2000年11月。

質問紙

質問紙は、教示、例、および4つの領域における妬み喚起場面ごとの、妬み感情尺度、対処方略尺度、獲得可能性尺度から構成されている。また4つの領域の対象に関する重要性尺度、児童生徒用妬み傾向尺度(DESC)から構成された質問紙が別個に配布・実施された。

なお、②から⑤までの尺度の各項目は、当該概念に対する反応から順に4—1点が与えられ得点化された。

①児童・生徒用妬み傾向尺度(DESC)：研究1において作成された8項目から構成された尺度である。

②領域重要度尺度：4項目からなる。4つの領域に対応した対象が自分にとってどれだけ重要であるかについて、4段階評定(「とても重要だ」「すこし重要だ」「あまり重要でない」「まったく重要でない」)による回答が求められた(APPENDIX参照)。

妬み喚起場面：予備調査によって明らかにされた8領域の中で、出現率が10%以上であった4領域の内容に沿った仮想的なストーリーと、それに対応した投影的な絵をそれぞれ用意した⁵。

③獲得可能性尺度：領域ごとに、当該領域の対象を獲得する可能性がどの程度あるかという認知を測定するために作成された4項目からなる尺度である。獲得の漠然とした可能性、獲得の容易さ、獲得の努力による可能性、獲得の相応しさそれぞれについて4段階評定(「そう思う」「すこしそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」)による回答が求められた。

④妬み感情尺度：澤田(2001)が用いた13項目の妬み感情語より、本研究における妬みの定義にそぐわないと判断された1語(「あこがれた」)を除いた12語を過去形から現在形に直した感情語リスト(「くやしい」「不満だ」「うらやましい」「つらい」「ムカつく」「落ち込む」「腹が立つ」「悲しい」「にくらしい」「恥ずかしい」「うらむ」「苦しい」)が提示された。当該の場面において、自分がストーリーの主人公の立場だったら、それぞれの感情をどの程度感じるかについて4段階評定(「そう思う」「すこしそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」)による回答が求められた。

⑤妬みの対処方略尺度：予備調査によって明らかにされた16の対処方略を項目化したものを用いた。領域のストーリーごとに、すべての項目について4段階評定(「そうする」「たぶんそうする」「あまりそうしない」「そうしない」)による回答が求められた。

⁵ 4つの領域で用いた文章は以下の通りである。なお、被調査者が主人公の立場にたって考えやすいように、男女別の投影的な絵がともに提示された。成績領域：「A君(さん)は、あなたの友だちです。ある日、学校でテストがありました。次の日にテストを返してもらい、さっそくA君とテストの見せ合いをすると、A君の方が、あなたよりずいぶん良い点数をとっていました」。運動領域：「B君は、あなたの友だちです。ある日、体育の時間に100メートル走がありました。あなたはB君といっしょに走ったのですがすぐに追い抜かれてしまい、B君の方が先にゴールしました」。技術領域：「C君は、あなたの友だちです。ある日、図工(美術)の時間にみんなで同じ絵をかきました。かき終わった絵をみると、あなたのかいた絵にくらべて、C君の絵はずいぶん上手に掛けていました」。財産領域：「D君は、あなたの友だちです。最近D君は、あなたが手に入れることのできなかった大人気のゲーム機を買ったようで、いつも楽しそうにゲームの話をします」。

TABLE 3 妬み対処方略項目平均と標準偏差、およびバリマックス回転後の因子パターン行列

項目内容	平均	標準偏差	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
07.その人の悪口を言いふらす	4.57	1.55	.87	.05	.02	.75
05.その人をたたいたりけったりする	4.49	1.49	.78	.06	.05	.62
13.その人のことを無視して、できるだけいっしょにいないようにする	4.87	1.84	.76	.10	.08	.59
15.近くにある物を投げたり壊したりして、八つ当たりをする	4.70	1.95	.72	.15	.08	.61
10.だれかに不満や文句を言って、当たり散らす	4.95	1.90	.71	.24	.10	.55
08.自分よりもできない人やダメな人とくらべる	5.67	2.39	.49	.31	.05	.44
06.だれかに頼んで、なんとかしてもらう	5.08	1.80	.48	.15	.38	.56
04.何もしないで、そのことを忘れるようにする	7.51	2.97	.17	.73	.08	.57
11.そのことはまったく関係のないことをして、気をまぎらわす	7.30	3.32	.22	.63	.28	.52
16.仕方がないとあきらめる	8.31	3.47	.10	.59	-.08	.36
03.そのことが自分にとってあまり大切なことではないと考えなおす	7.57	2.76	.13	.52	.21	.33
02.どうすればよいのかを、だれかに相談する	7.35	3.10	.17	.03	.75	.59
01.その人に負けないように、自分なりに努力する	11.08	3.01	.00	-.29	.56	.39
14.自分の気持ちをだれかに話して、なぐさめてもらう	5.62	2.46	.34	.19	.53	.44
12.自分の長所を思い出したり、自分が得意なことをしたりする	8.18	3.79	.09	.29	.49	.33
09.その人のことをほめる	10.07	3.49	-.08	.15	.35	.15
説明分散			3.70	1.99	1.83	7.52

Note. 得点範囲は4-16点。

結果と考察

対処方略尺度の因子分析

4領域を通じた対処方略の構造を明らかにするために、各領域の同じ項目を合計した得点⁶を用いて対処方略16項目を因子分析にかけた(TABLE 3)。共通性の初期値を1とした重み付けのない最小自乗法により3因子を抽出し、バリマックス回転を施した。第1因子には、「その人の悪口を言いふらす」「その人をたたいたりけったりする」などの項目に高い負荷量が認められた。これらの項目は、問題の解決にはほとんど結びつかず、攻撃的な方略であることから、第1因子を「破壊的関与」因子と命名した。第2因子で高い負荷量を示している項目は、「何もしないで、そのことを忘れるようにする」「そのことが自分にとってあまり重要でないと考えなおす」などの項目であった。これらの項目は、誰ともあまり関わりを持たず、問題の解決にも従事しないことを指示内容としているが、何もしないだけではなく、故意に問題そのものに携わらないようにしているとも解釈できる。そこで、第2因子は「意図的回避」因子と名付けた。最後に、第3因子には、「どうすればいいのか誰かに相談する」「その人に負けないように、自分なりに努力する」といった、自分と他者の両方を

資源として問題解決に積極的に関わろうとする姿勢がうかがえる項目への負荷量が高かったので、「建設的解決」因子と命名した。

このように、妬みの対処方略は「破壊的関与」「意図的回避」「建設的解決」の3因子構造であることが示された。そこで、妬みの対処方略に関する3つの下位尺度を構成し、信頼性について検証するために、内的整合性の観点からクロンバックの α 係数を求めた。その結果、破壊的関与尺度で $\alpha = .87$ 、意図的回避尺度で $\alpha = .73$ 、建設的解決尺度で $\alpha = .66$ と、建設的解決尺度がやや低かったものの、ある程度満足のいく値が得られた。

対処方略の学年差と性差

TABLE 4に、学年別・男女別の対処方略3下位尺度得点の平均値と標準偏差を示した。これらの得点を用いて、7(学年: 小学3, 4, 5, 6年, 中学1, 2, 3年)×2(性: 男子, 女子)の2要因分散分析を行った。その結果、いずれの尺度においても交互作用は認められなかった。破壊的関与尺度では、性の主効果($F(1,866) = 4.78, p < .05$)が認められ、男子の方が女子よりも得点が高かった。意図的回避尺度では、学年の主効果のみが認められた($F(6,870) = 2.71, p < .05$)。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、小学3年より中学3年の方が有意に得点が高かった($MSe = 85.96, p < .05$)。また、建設的解決尺度でも学年の主効果が認められ($F(6,878) = 5.52, p < .001$)、多重比較の結果、小学3年より中学2年、小学4年より中学1年、2年、3年の方が低かった($MSe = 103.89, p < .05$)。すなわち、女子よりも男子の方が破壊的関与を用いる傾向にあり、加齢に伴い意図的回避が選

⁶ 4領域の対処方略項目を合計せずに、領域ごとに因子分析(重み付けのない最小自乗法、バリマックス回転)した結果、すべての領域において同様の3因子構造であることが確認された。また、4(領域)×16(対処方略)の計64項目を用いた主成分分析を行ったところ、項目は領域ごとではなく、対処方略ごとにまとまっていた。そこで対処方略16項目は領域を超えた3因子構造であると判断し、以後の因子分析と分散分析では、全領域の対処方略項目を合計した得点を用いた。

TABLE 4 学年別・男女別の対処方略下位尺度得点の平均と標準偏差

		小学3年		小学4年		小学5年		小学6年		中学1年		中学2年		中学3年	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
破壊的関与	N =	(53)	(48)	(48)	(56)	(53)	(51)	(55)	(57)	(79)	(80)	(66)	(77)	(79)	(78)
		36.91	32.29	33.71	36.27	34.06	31.45	35.89	34.53	32.97	33.65	36.74	34.08	33.80	31.72
意図的回避	N =	[13.10]	[4.83]	[7.33]	[13.43]	[7.30]	[5.76]	[14.23]	[8.93]	[7.15]	[8.51]	[14.01]	[8.48]	[7.12]	[5.99]
		(56)	(50)	(51)	(55)	(51)	(52)	(55)	(56)	(78)	(80)	(69)	(76)	(77)	(78)
建設的解決	N =	29.45	26.70	30.45	31.49	30.24	28.60	29.93	32.20	29.42	31.36	31.35	30.97	32.48	32.27
		[10.02]	[8.20]	[10.02]	[9.09]	[9.24]	[10.21]	[11.07]	[9.14]	[7.68]	[8.23]	[9.68]	[9.54]	[9.71]	[8.40]
		(54)	(55)	(52)	(57)	(51)	(54)	(56)	(56)	(78)	(79)	(67)	(76)	(79)	(78)
		44.00	45.35	43.54	48.18	44.10	42.78	40.96	42.96	41.05	41.09	40.36	39.34	39.66	42.64
		[10.27]	[10.42]	[10.39]	[9.71]	[9.17]	[10.31]	[10.98]	[10.56]	[8.58]	[10.57]	[9.82]	[9.62]	[11.21]	[10.73]

Note. 得点範囲は、破壊的関与尺度が28-112点、意図的回避尺度が16-64点、建設的解決尺度が20-80点。
[]内は標準偏差。

扱されやすくなる一方で、建設的解決は選択されにくくなるといえる。こうした方略選択の学年差については、中学生になると問題解決の難しさを理解せざるを得なくなるため、場当たりの努力ではなく、割り切って回避的に対処しがちになることが反映された結果と考えた。

領域別・年齢帯別の因果関係の検討

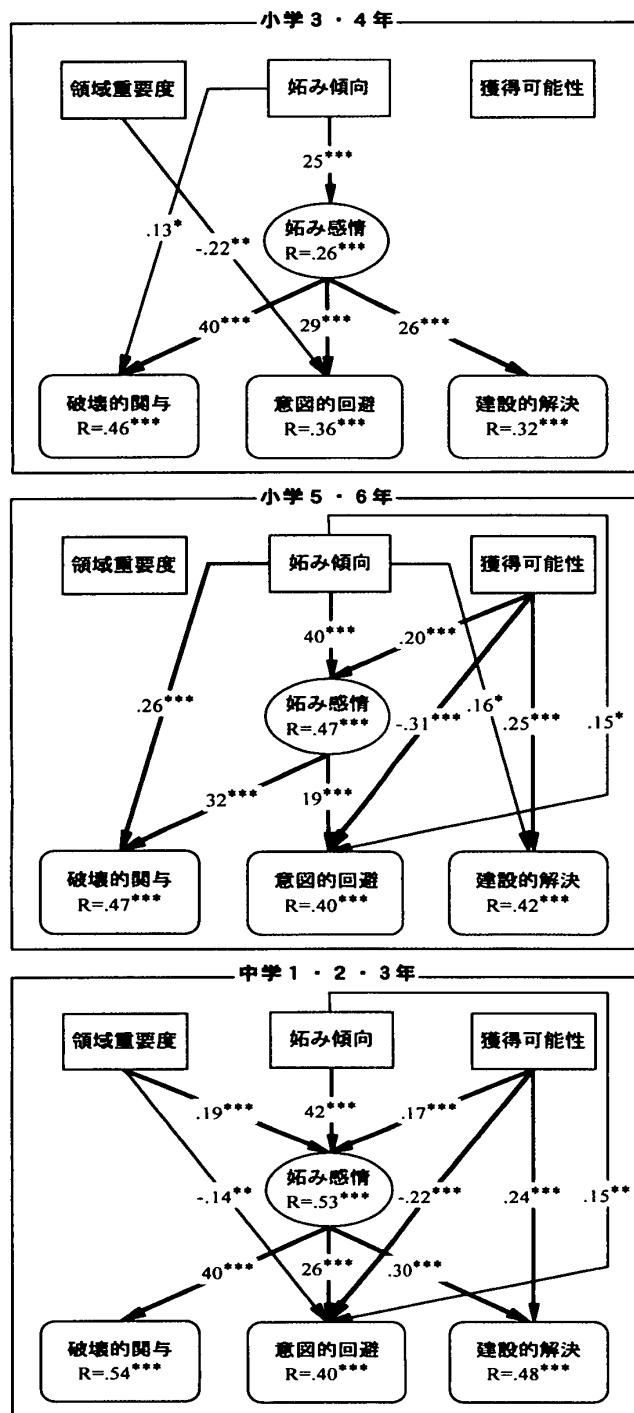
妬み感情の喚起には領域重要性、対処方略の選択には獲得可能性がそれぞれ影響を及ぼしているであろうという仮説を検証するために、領域ごとに対処方略の3下位尺度、妬み感情、領域重要性、獲得可能性の得

点を用いた重回帰分析を行った。なお、領域を超えた対処方略の分散分析で小学3・4年と中学生との間で採用される方略に違いが認められた点と、Bers & Rodin (1984) によって領域重要度が妬み感情の喚起に及ぼす影響の発達的变化が示された年齢帯との対応を期するため、Bers & Rodin (1984) にならい年齢帯を約2年ごとで区切った。そして、領域ごと（成績、運動、財産、技術）に年齢帯別（小学3・4年、小学5・6年、中学1・2・3年）の重回帰分析を行った（TABLE 5 参照）。これらのうちで、各領域に共通した傾向が認められた運動領域において影響関係が有意であったものを FIGURE 1 のパ

TABLE 5 成績・運動・財産・技術領域における年齢帯別の重回帰分析結果（標準偏回帰係数）

領域	説明変数	小学3・4年				小学5・6年				中学1・2・3年			
		妬み感情	破壊的関与	意図的回避	建設的解決	妬み感情	破壊的関与	意図的回避	建設的解決	妬み感情	破壊的関与	意図的回避	建設的解決
成績	妬み傾向	.28***	.06	.14*	.09	.34***	.22***	.13	.17**	.43***	.15***	.13**	.01
	領域重要度	.17*	-.07	-.16*	-.05	.21***	-.02	-.06	.06	.25***	-.07	-.15***	.07
	獲得可能性	.09	-.22***	-.09	.13	.21***	-.07	-.22***	.22***	.16***	-.16***	-.11**	.24***
	妬み感情	—	.45***	.07	.09	—	.37***	.12	.14	—	.38***	.19***	.18***
	重相関係数	.35***	.49***	.24**	.20	.52***	.48***	.28***	.40***	.59***	.44***	.28***	.37***
	F 値	9.20	16.00	2.95	2.10	24.53	14.58	3.96	9.41	79.31	25.51	9.92	18.54
運動	妬み傾向	.25***	.13*	.04	.07	.40***	.26***	.15*	.16*	.42***	.10	.15**	.03
	領域重要度	.02	.07	-.22**	.00	.03	-.07	-.07	.09	.19***	.00	-.14**	.08
	獲得可能性	.07	-.06	.05	.12	.20***	-.06	-.31***	.25***	.17***	-.03	-.22***	.24***
	妬み感情	—	.40***	.29***	.26***	—	.32***	.19**	.13	—	.40***	.26***	.30***
	重相関係数	.26***	.46***	.36***	.32***	.47***	.47***	.40***	.42***	.53***	.54***	.40***	.48***
	F 値	4.54	12.26	6.80	5.37	18.83	13.82	9.44	10.86	58.14	27.29	20.45	32.98
財産	妬み傾向	.27***	.06	.06	.12	.33***	.23***	.04	.09	.32***	.02	.10*	.07
	領域重要度	.13	.19**	-.09	.02	.06	.01	-.08	-.01	.10*	.00	-.13*	.02
	獲得可能性	.18*	.00	-.10	.28***	.23***	.05	-.09	.24***	.23***	-.01	-.03	.21***
	妬み感情	—	.38***	.28***	.14	—	.46***	.21**	.24**	—	.51***	.21***	.30***
	重相関係数	.39***	.49***	.30**	.39***	.45***	.61***	.22*	.42***	.47***	.51***	.26***	.46***
	F 値	11.82	15.11	4.69	8.68	15.96	27.98	2.58	10.31	41.22	39.67	8.34	29.15
技術	妬み傾向	.34***	-.02	.10	.05	.33***	.15*	.10	.07	.31***	.10*	.15**	.02
	領域重要度	-.04	.05	-.14*	.06	.03	-.15*	-.11	.09	.12*	-.04	-.22***	.07
	獲得可能性	.11	.01	-.22**	.13	.27***	-.06	-.16**	.30***	.26***	.00	-.13**	.33***
	妬み感情	—	.47***	.31***	.30***	—	.39***	.21**	.16*	—	.36***	.27***	.27***
	重相関係数	.37***	.47***	.41***	.37***	.47***	.47***	.28**	.46***	.49***	.40***	.37***	.53***
	F 値	10.08	13.10	10.03	7.81	18.73	13.93	4.36	13.02	45.86	20.45	17.73	17.23
	df	(3,191)	(4,190)	(4,190)	(4,190)	(3,198)	(4,197)	(4,197)	(4,197)	(3,439)	(4,438)	(4,438)	(4,438)

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$



Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

FIGURE 1 運動領域の年齢帯別パス・ダイアグラム

ス・ダイアグラムに示した。

まず、各領域に共通してみられた傾向として、個人差要因である妬み傾向が、どの年齢帯においても妬み感情の喚起要因となり得ている点と、小学5・6年において、破壊的関与方略の選択に直接影響を及ぼしている点が挙げられる。また、成績領域と財産領域の小学3・4年では、妬み感情の対処として建設的解決は

用いられることはなく、破壊的関与が選択されやすい傾向にある。したがって、妬み傾向が高い小学生は、妬み感情を感じやすく、破壊的な行動に帰結しやすいと考えられ、小学生が情動的・行動的な対処方略をとりがちであるという知見 (Band & Weisz, 1988) とよく対応している。しかし、中学生では妬み傾向から意図的回避方略への有意なパスも認められることから、妬み傾向の高い中学生は、行動的な対処だけではなく、認知的な対処をとることも可能になると考えられる。なお、中学生では、領域による因果関係の違いがほとんど認められなかった。このことから、青年期に近づくと、領域を問わず共通したプロセスを経て対処方略が選択されるようになるのではないかと予想される。

次に、状況要因が妬み感情に及ぼす影響については、以下のような結果が認められた。すなわち、成績領域を除いた3領域では、領域重要度の妬み感情の喚起への影響は中学生になるまで認められなかったが、獲得可能性から妬み感情へのパスは、小学5・6年の時点で有意であった。つまり、小学生では、当該の対象が自分にとって重要であるか否かよりも、将来獲得できるか見込みの認知の方が優先されて妬み感情が喚起されやすい傾向にあるが、中学生になると、領域が自己定義に関わるかどうかに基づいて妬みが喚起されやすくなるといえる。これは、加齢に応じて領域重要度の影響を受けて妬みが強まるという結果 (Bers & Rodin, 1984) と対応している。また、成績領域では、小学3・4年の時点で、領域重要度に応じて妬み感情が喚起されていた。これは、学校生活の早い段階から比較の対象となる重要なものとして、成績が子どもたちの間に広く浸透していることに由来した結果と考えられる。また、成績領域の小学生で、妬み感情から有意なパスが認められる方略は破壊的関与のみであり、年齢帯を問わず獲得可能性が低いと破壊的関与が採用される傾向にあった。このことから、成績のような、普段の生活と密着した重要な対象の獲得が困難だと判断された場合、特に小学生は破壊的な対処が採用されやすいことが看取できる。

獲得可能性の影響力に関しては、領域を超えて年齢帯による違いが認められた。小学3・4年ではほとんどみられなかった獲得可能性の影響が、小学5・6年になると妬み感情や意図的回避、建設的解決に影響を及ぼすようになっていく。このことから、少なくとも小学校高学年以上であれば、コントロール可能性に応じた対処方略の選択が可能であると考えられる。しかし、財産領域では、小学3・4年で既に獲得可能性が

高いと妬み感情が感じられ、建設的解決が選択されやすいことが示された。ただし、妬み感情から建設的解決への直接パスは有意ではない。こうした傾向がもたらされた一因として、問題のコントロール可能性の明確さを挙げることができる。財産領域とは具体的な物の所有に関わった領域であり、運動や技術などの能力や評価に関わる領域に比して、獲得する方法の理解が容易である。したがって、年齢の低い子どもは、得やすい対象を持った他者に対して妬みを感じるものの、その感情を対処するために努力するというよりは、むしろ対象の獲得しやすさそのものに直接反応して建設的な解決を図る傾向にあると推察した。

全体的考察

研究1では、児童・生徒用妬み傾向尺度(DESC)が作成され、その信頼性・妥当性が検討された。ここでは、妬み傾向は単因子構造であり、敵意や劣等感情といった妬みと密接な関連が指摘される尺度との間に中程度の相関があることが確認された。

研究2では、妬みという現象のひとつの顕現である対処方略を取り上げた。そして、対処方略の構造を検討した結果、破壊的関与、意図的回避、建設的解決という3因子が見出された。ストレスの対処方略には、問題焦点型と情動焦点型の2つがあるとされており(Lazarus & Folkman, 1984)、破壊的関与と意図的回避が情動焦点型対処に、建設的解決が問題焦点型対処にそれぞれ対応するものと考えられ、これらが妬み状況というストレス状況の対処に用いられる方略として妥当なものと判断できる。また、Vecchio (1997) による職場における妬みの対処方略の構造とも類似した結果が得られた。したがって、本研究によって、成人と同様の妬みの対処方略が、子どもにおいても採用されていることが明らかにされたといえよう。

次に、対処方略選択をめぐる因果関係を検討したところ、(1)領域重要度が加齢に応じて影響力を増してくること、(2)妬み傾向と獲得可能性が妬みの喚起とその対処方略の選択に直接的に関わっていることが、それぞれ明らかとなった。中でも、意図的回避や建設的解決の選択に、獲得可能性が大きな影響力をもっていたことは興味深い。そして、獲得可能性の影響が低い年齢帯で認められたことは、小学生でも、コントロール可能性に応じて妬みの対処の仕方を変えることが十分に可能であることを示唆している。

ところで、今回は、妬み感情全体が妬み対処方略選択の因果モデルの中でどのような位置にあるかに焦点

を当てたため、妬みの細かな側面については触れていない。たとえば、妬みには、悪意や敵意といったネガティブな特徴が顕著な感情反応と、そうではない感情反応があるという(Neu, 1980; Parrott, 1991)。また、澤田(2001)は、妬み感情には、妬みの中核をなす感情、否定的な自己感情、および敵意的な対人感情という3つの側面があることを示唆している。今後は、妬みの多様性を視野に入れた研究を行っていく必要があるだろう。

また、いじめに代表される問題行動に関わる妬みのメカニズムの解明も期待される。いじめ行動に関わることが確認されているやつあたりの対処(新藤・斎藤, 1998)は、本研究における破壊的関与方略に対応している。そのため、主として妬みに起因したいじめに関連した方略として、破壊的関与が用いられているのではないかと考えられる。獲得可能性が低いと採用されるのは意図的回避方略であり、これは合理的な判断機構であるといえよう。しかし、小学5・6年以降になると、獲得可能性が高いと建設的解決方略が選択されるだけではなく、妬み感情の喚起が促され、それを媒介として破壊的関与が選択されるという結果も得られた。同様に、中学生でも、領域重要度が妬み感情の喚起を促すことで、間接的に破壊的関与の選択に影響を及ぼしている。そのため、獲得可能性が高いこと、つまり相手に追いつけそうだという気持ちや、対象が自分にとって重要であるという認知が、いじめに関わるような行動に結びつくという合理的な判断機構とは異なる機構が存在する可能性もありうる。そこで、ネガティブな方略の選択が、獲得可能性や領域重要度の高低を合理的に判断した結果もたらされる通常の反応であるのか、それとも、こうした状況要因が高すぎることで結びついてしまう別の機構の存在によるものなのかを明らかにするために、より詳細な検討が望まれる。

引用文献

- Band, E.E., & Weisz, J.R. 1988 How to feel better when it feels bad : Children's perspectives on coping with everyday stress. *Developmental Psychology*, 24, 247—253.
- Bers, S.A., & Rodin, J. 1984 Social-comparison jealousy : A developmental and motivational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 766—779.
- Causey, D.L., & Dubow, E.F. 1992 Development of a self-report coping measure for elementary

- school children. *Journal of Clinical Child Psychology*, **21**, 47—59.
- 土居健郎 1998 「甘え」と「妬み」 児童心理, **52** (7), 1—11.
- Foster, G.M. 1972 The anatomy of envy : A study in symbolic behavior. *Current Anthropology*, **13**, 165—202.
- Gold, B.T. 1996 Enviousness and its relationship to maladjustment and psychopathology. *Personality and Individual Differences*, **21**, 311—321.
- Haslam, N., & Bornstein, B.H. 1996 Envy and jealousy as discrete emotions : A taxometric analysis. *Motivation and Emotion*, **20**, 255—272.
- 清永賢二・麦島文夫・高橋良彰 1985 いじめに関わる非行の実態調査研究(2)—非行の状況といじめに対する非行少年の態度— 科学警察研究所報告防犯少年編, **26**, 144—161.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York : Springer.
- Moos, R.H. 1984 Context and coping : Toward a unifying conceptual framework. *American Journal of Community Psychology*, **12**, 5—36.
- 本明 寛・久米 稔・織田正美・応用教育研究所 1976 教研式 M-G 性格検査手引 日本図書文化協会
- Neu, J. 1980 Jealous thought. In A.O. Rorty (Ed.), *Explaining emotion*. Berkeley : University of California Press. Pp.425—463.
- Parrott, W.G. 1991 The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey (Ed.), *The psychology of jealousy and envy*. New York : Guilford Press. Pp.3—30.
- Parrott, W.G., & Smith, R.H. 1993 Distinguishing the experiences of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 906—920.
- 坂井明子・曾我祥子・大芦 治・山崎勝之 1998 小学生用攻撃性質問紙(HAQs)の作成(2) 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 928.
- Salovey, P. 1991 Social comparison processes in envy and jealousy. In J. Suls & T.A. Wills (Eds.), *Social comparison : Contemporary theory and research*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum, Pp.261—285.
- Salovey, P., & Rodin, J. 1986 The differentiation of social-comparison jealousy and romantic jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1100—1112.
- Salovey, P., & Rodin, J. 1988 Coping with envy and jealousy. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **7**, 15—33.
- 澤田匡人 1999 児童・生徒用「妬み」測定尺度作成の試み 日本心理学会第 63 回大会発表論文集, 719.
- 澤田匡人 2001 児童・生徒における妬みの感情構造の検討 日本発達心理学会第 12 回大会発表論文集, 128.
- 嶋田洋徳・神村栄一・宇津木成介・安藤明人 1998 中学生用攻撃性質問紙(HAQs)の作成(2) 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 931.
- Silver, M., & Sabini, J. 1978 The perception of envy. *Social Psychology*, **41**, 105—117.
- 新藤貴昭・斎藤誠一 1998 いじめと学校ストレスの関連(2) 日本教育心理学会第 40 回総会発表論文集, 389.
- Smith, R.H., Parrott, W.G., Diener, E.F., Hoyle, R. H., & Kim, S.H. 1999 Dispositional envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 8, 1007—1020.
- Smith, R.H., Turner, T.J., Garonzik, R., Leach, C. W., Urch-Druskat, V., & Weston, C.M. 1996 Envy and schadenfreude. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 158—168.
- Smith, V., & Whitfield, M. 1983 The constructive use of envy. *Canadian Journal of Psychiatry*, **28**, 14—17.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance : Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 561—574.
- Tesser, A., & Collins, J. 1988 Emotion in social reflection and comparison situations : Intuitive, systematic, and exploratory approaches. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 695—709.
- Tesser, A., & Smith, J. 1980 Some effects of task relevance and friendship on helping : You don't always help the one you like. *Journal of*

Experimental Social Psychology, **16**, 582—590.

坪田雄二 1991 社会的比較によって生じる嫉妬と自尊感情の関連性の検討 広島大学教育学部紀要(第1部), **40**, 113—117.

Vecchio, R.P. 1997 Categorizing coping responses for envy : A multidimensional analysis of workplace perceptions. *Psychological Reports*, **81**, 137—138.

謝 辞

本論文の作成にあたり、松井 豊先生(筑波大学心理学系)の助言を受けた。また、根津朋実氏(筑波大学人間総合科学研究科)の協力を得た。ここに記して謝意を表します。

(2001.7.6 受稿, '02.2.19 受理)

APPENDIX

領域重要度尺度の項目

- ・あなたにとって、テストで良い点数をとることは、どれくらい重要ですか
- ・あなたにとって、はやく走ることは、どれくらい重要ですか
- ・あなたにとって、上手に絵をかくことは、どれくらい重要ですか
- ・あなたにとって、ゲーム機を持っていることは、どれくらい重要ですか

獲得可能性尺度の項目

- ・あなたは、いつかは、その人と同じように(各領域の対象)することができる(獲得の漠然とした可能性)
- ・あなたにとって、その人と同じように(各領域の対象)することは、そんなに難しいことではない(獲得の容易さ)
- ・あなたは、がんばれば、その人と同じように(各領域の対象)することができる(獲得の努力による可能性)
- ・その人と同じように(各領域の対象)することは、あなたにふさわしい(獲得の相応しき)

Dispositional Envy, Domain Importance, and Obtainability of Desired Objects : Selection of Strategies for Coping with Envy

MASATO SAWADA (UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND KUNIJIRO ARAI (INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2002, 50, 246—256

The present study examined the effect of dispositional envy, domain importance, and the obtainability of desired objects on the selection of coping strategies. In Study 1, a dispositional envy scale for children (DESC) was constructed. Factor analysis of data from 879 elementary and junior high school pupils indicated a single factor for the 8 items on the scale. Reliability, construct validity, and concurrent validity of the scale were confirmed. In Study 2, 915 elementary and junior high school pupils completed a questionnaire. Factor analysis of coping strategies revealed 3 factors : “constructive solution,” “destructive engagement,” and “intentional avoidance.” Path analysis indicated that those who believed that desired objects could very likely be obtained tended to feel envy and to use a “constructive solution” coping strategy, while those who indicated that both obtainability and domain importance were low tended to use an “intentional avoidance” coping strategy. The perception of domain importance evoked greater situational envy in junior high school pupils than in elementary school pupils.

Key Words : envy, coping strategies, dispositional envy, domain importance, obtainability